

シティライフは今年で30年目を迎えます

30 anniversary Life Archives

シティライフ創刊30年記念企画 シティライフアーカイブズ

北摂の歴史記録

現在、そして未来にもつながる過去の情報を取材、編集し、記録する特集です。北摂の歴史から、私たちの住むまちの魅力を知り、学ぶ機会になればと思います。第20回は「山田村」について紹介します。

検索

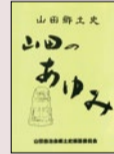
第20回

山田村

昭和30年に吹田市と合併した山田村は山田千軒、吹田千軒といわれた大きな村でした。古くは平安時代から江戸時代に栄えた寺社がある山田村。本特集では吹田市との合併前後の歴史を紹介します。

歴史案内人

山田郷土史「山田のあゆみ」編集発行：山田自治会郷土史編集委員会
2001年に発行されたこの郷土史をもとに本特集を作成しました。写真は全て野口昭雄氏撮影



山田の地名の起源

西暦478年、伊勢神宮の天照大神(あまてらすおおみかみ)の豊受大神(食を司る神)が、丹波から伊勢の山田ヶ原に遷座された。同じ頃、天照大神の親神である伊邪那岐命と伊邪那美命が小川谷の地に祀られて伊射奈岐神社(吹田市山



明治22年(1889年)の行政区。出典:「わかりやすい吹田の歴史」



昭和20年ごろのMAP
昭和15年4月1日に三島郡吹田町、千里村、岸部村、豊能郡豊津村の4町村が合併し「吹田市」が誕生。出典:「山田のあゆみ」



山田下イスマヤ付近 昭和30年



農協笹詰工場北大阪農協本部建築中 昭和29年

と、国策として町村合併促進法が施行される。山田村では、当初からあった吹田市への合併案に対し、三宅、味舌、山田の3町村合併案が千里丘長野選出議員から提出されるも、再三の審議の結果吹田合併派に反対された。昭和29年には山田村議会に合併問題協議委員会が発足。他町村にも働きかけて、合併の利害得失の調査研究を行うことが議決された。合併案は、山田、三宅、味舌の3町村での合併、これに味舌と鳥飼を加えた5町村での合併(現摂津市との合併)、

増進するために、市町村を適正規模に拡大しようとする気運が全国的に高まり、「昭和の大合併」へと突入していく。山田村でもまた、昭和27年に山田村合併協議会が発足。約15kmの広大な地に人口わずか9000人ほどが住む農村地域だったため、村長と村議会が合併に向けた協議が進められていた。昭和28年になる

取材を終えて

阪急山田駅の南東に、昔ながらの家屋が立ち並んでいます。以前、私は吹田市山田東に住み、この界隈を歩いたことがあります。路地が入り組み、情緒ある風景と神社仏閣などを見ていると、昔の暮らしや行き交う人の気配を感じることが出来ます。吹田市と山田村の合併はほんの60年前。北摂の中でも劇的に変化を遂げた町ではないでしょうか。

シティライフ編集部 尾浴芳久

山田村が吹田市に合併されるまで

明治22年、町村制の施行に伴い山田上、山田中など5区画が合併の山田村を振り返る。

昭和20年代後半の山田村では、戦後の混乱から立ち直り、中小学校の整備や工場建設が進むとともに、京阪バスから経営権を譲渡された阪急バスにより路線バスの運行も始

まった。この頃から、行政を合理的かつ能率的に運営し住民の福祉を

増進するために、市町村を適正規模に拡大しようとする気運が全国的に高まり、「昭和の大合併」へと突入していく。山田村でも

また、昭和27年に山田村合併協議会が発足。約15kmの広大な地に人口わずか9000人ほどが住む農村地域だったため、村長と村議会が合併に向けた協議が進められていた。昭和28年になる

さらには5町村での合併後に吹田市と合併する3案。山田の各地区では、夜ごと公聴会が開かれ、住民と意見が交わされた。同年11月、山田、三宅、味舌の3町村合併では財政的に自立できるとの見通しが立たず、吹田市から有利な合併要件が提示されたこともあり、1村でも多くして吹田市と合併することに決定。しかし他町村は吹田市との合併には消極的で、山田村だけが吹田市と単独合併することになった。

昭和35年、千里丘陵に15万人が住まうニュータウン建設の構想が発表される。大規模な用地買収が始まり、山田では5km²が3.3m²あたり17750円程度で買収された。土地を売った農民は、他産業に就職したり商売を始めるとして離農していった。中には文化アパートを建築して家賃収入を得たり、他工場に融資して財産運用する人もいたという。またこの開発によって、高野台、佐竹台、津雲台、古江台、藤白台、青山

山田村が吹田市に合併されるまで

昭和20年代後半の山田村では、戦後の混乱から立ち直り、中小学校の整備や工場建設が進むとともに、京阪バスから経営権を譲渡された阪急バスにより路線バスの運行も始

まった。この頃から、行政を合理的かつ能率的に運営し住民の福祉を

増進するために、市町村を適正規模に拡大しようとする気運が全国的に高まり、「昭和の大合併」へと突入していく。山田村でも

また、昭和27年に山田村合併協議会が発足。約15kmの広大な地に人口わずか9000人ほどが住む農村地域だったため、村長と村議会が合併に向けた協議が進められていた。昭和28年になる

さらには5町村での合併後に吹田市と合併する3案。山田の各地区では、夜ごと公聴会が開かれ、住民と意見が交わされた。同年11月、山田、三宅、味舌の3町村合併では財政的に自立できるとの見通しが立たず、吹田市から有利な合併要件が提示されたこともあり、1村でも多くして吹田市と合併することに決定。しかし他町村は吹田市との合併には消極的で、山田村だけが吹田市と単独合併することになった。

昭和35年、千里丘陵に15万人が住まうニュータウン建設の構想が発表される。大規模な用地買収が始まり、山田では5km²が3.3m²あたり17750円程度で買収された。土地を売った農民は、他産業に就職したり商売を始めるとして離農していった。中には文化アパートを建築して家賃収入を得たり、他工場に融資して財産運用する人もいたという。またこの開発によって、高野台、佐竹台、津雲台、古江台、藤白台、青山

山田とニュータウン

昭和35年、千里丘陵に15万人が住まうニュータウン建設の構想が発表される。大規模な用地買収が始まり、山田では5km²が3.3m²あたり17750円程度で買収された。土地を売った農民は、他産業に就職したり商売を始めるとして離農していった。中には文化アパートを建築して家賃収入を得たり、他工場に融資して財産運用する人もいたという。またこの開発によって、高野台、佐竹台、津雲台、古江台、藤白台、青山

昭和38年、ニュータウンへの入居が始まる。竹やぶと田園が広がっていった山田が超近代都市として生まれ変わったことは、住民の誇りだった。ただ、「山田の地名はニュータウンのどこにも残らず、その地が山田の一部だったことを知る人が少ないことは残念である」と山田郷土史に記されている。

昭和38年、ニュータウンへの入居が始まる。竹やぶと田園が広がっていった山田が超近代都市として生まれ変わったことは、住民の誇りだった。ただ、「山田の地名はニュータウンのどこにも残らず、その地が山田の一部だったことを知る人が少ないことは残念である」と山田郷土史に記されている。

昭和38年、ニュータウンへの入居が始まる。竹やぶと田園が広がっていった山田が超近代都市として生まれ変わったことは、住民の誇りだった。ただ、「山田の地名はニュータウンのどこにも残らず、その地が山田の一部だったことを知る人が少ないことは残念である」と山田郷土史に記されている。

昭和38年、ニュータウンへの入居が始まる。竹やぶと田園が広がっていった山田が超近代都市として生まれ変わったことは、住民の誇りだった。ただ、「山田の地名はニュータウンのどこにも残らず、その地が山田の一部だったことを知る人が少ないことは残念である」と山田郷土史に記されている。

昭和38年、ニュータウンへの入居が始まる。竹やぶと田園が広がっていった山田が超近代都市として生まれ変わったことは、住民の誇りだった。ただ、「山田の地名はニュータウンのどこにも残らず、その地が山田の一部だったことを知る人が少ないことは残念である」と山田郷土史に記されている。

昭和38年、ニュータウンへの入居が始まる。竹やぶと田園が広がっていった山田が超近代都市として生まれ変わったことは、住民の誇りだった。ただ、「山田の地名はニュータウンのどこにも残らず、その地が山田の一部だったことを知る人が少ないことは残念である」と山田郷土史に記されている。

昭和38年、ニュータウンへの入居が始まる。竹やぶと田園が広がっていった山田が超近代都市として生まれ変わったことは、住民の誇りだった。ただ、「山田の地名はニュータウンのどこにも残らず、その地が山田の一部だったことを知る人が少ないことは残念である」と山田郷土史に記されている。



今竹の坂道を登るバス弘済院 昭和30年



山田下から山田中学 昭和29年



山田の祭-下大神木付近 昭和32年



北消防署付近にござり池から小野原-弘済院 昭和31年

吹田市山田村合併協定書(一部抜粋)

- ◆山田村の一般職員は引き続き吹田市の職員として引き継ぐものとする。
 - ◆千里丘清水線、新設継続事業の実施、千里丘新芦屋線新設、豊中茨木線新設、葛上線改修、竹谷線改修、春日丘線改修、佐井寺山田線改修、山田川改修。
- ※合併にあたり山田村に道路改修等の条件が記載されていた。